

## 幕末明治の写真師列伝 第二十一回 下岡蓮杖 その二十

蓮杖はこのように(前号参照)本業の写真業の他にショイヤー夫人アンナから学んだ西洋油絵技法による日本の風景画などを板や紙に描いて販売し、玉突屋(ビリヤード場)、石版印刷業、乗合馬車屋の開業を行い、人力車を使った新規事業は取り組まなかったものの人には勧め、その他にも牧場を経営して牛乳の販売(搾乳業)をしている。「酪農や食肉業のパイオニアとして知られることになる中沢源蔵はその牧夫だったという。中沢が山手居留地に接する北方村天沼に自らの牧場を開いたのは、自身が出した広告(註1)では1872年(明治5年)のこととされている。」(横浜市発展記念館 斎藤多喜夫)

また、蓮杖が牛乳の販売をしていたことについては、横浜開港資料館編『横浜町会所日記横浜町名主小野兵助の記録』(横浜開港資料館、1991年)の明治四年(1871)5月15日の記述に以下のように書かれていることから証明できる。

十五日

(中略)

一、真鏡久之助 牛ノ乳到来之事

とはいえ、乗合馬車事業の後、蓮杖は他に新たな事業はせずにもっぱら写真業に専念することにした。

蓮杖は横浜のショイヤー夫妻、宣教師 S.R. ブラウン(Samuel Robbins Brown (1810-1880)、Lowder, Julia Maria の父)、英国領事 J. F. Lowder 夫人のジュリア・マリア・ブラウン・アンナ(Lowder, Julia Maria) などとは昔から懇意であったためキリスト教についても関心があったと思われる。また、宣教師 S.R. ブラウン一家が明治3年(1870)7月21日にそれまで赴任していた新潟(新潟英語学校)から横浜に再び戻った際にも、蓮杖とまた旧交を温めたことであろう。(宣教師 S.R. ブラウン一家の新しい住居は山手211番で、ミッション・ホーム(後の共立女学校)に隣接していた。現在の横浜共立学園の敷地は、山手212番と211番とを統合して、この旧ブラウン邸は横浜共立学園旧校舎の一部となっている。)

ヘボン式ローマ字の創始者で医師のジェームス・カーティス・ヘボン(James Curtis Hepburn)は、安政6年9月22日(1859年10月17日)に幕末の日本に來日し、横浜の宋興寺(横浜市神奈川区)に神奈川施療所を設けて医療活動を開始。文久3年(1863)には横浜に男女共学のヘボン塾を開設している。

このヘボンも蓮杖とは親交のあった人物で、それはヘボンが狩野派の画風を探求したいと思っていたことがその理由であった。ヘボンは病弱だった蓮杖の妻・美津が具合が悪い時にもすぐにやって来てくれ、治療してくれたという。美津の最後の脈を取ってくれたのもヘボンであった。

蓮杖はヘボンを通じて、当時横浜にいた米国宣教師ジェームス・ハミルトン・バラ(James Hamilton Ballagh)やディビッド・タムソン(David Thompson)といった外国人宣教師たちとも親しくなり、明治5年(1872)に宣教師 S.R. ブラウンなどが設立した、「横浜日本基督公会」創立当時の教会員にはならなかったものの、キリスト教に関心を深めていくことになる。

そして明治5年(1872)10月の米国聖書協会からの明治天皇への聖書献上、翌明治6年(1873)2月24日の明治新政府による切支丹(キリシタン)禁制の高札撤去と時代は変わり、ついに蓮杖も明治6年(1873)7月に横浜海岸教会(明治5年(1872)にバラにより設立された日本で最初のプロテスタント教会)で、バラによってまず子息の太郎次郎が、ついで蓮杖自身も洗礼を受けている。蓮杖の妻・美津は明

治8年(1875)2月5日に同じくバラによって洗礼を受け、同年2月12日に病気のため亡くなり、横浜石川町地蔵坂の蓮光寺に葬られた。この美津の墓は、現在も横浜の蓮光寺にあるが、後に美津のお骨は東京の染井霊園内にある下岡家の墓に改葬されたという。

明治維新後、東京は新生日本の首都として繁栄を始め、明治天皇も京都から東京に移り住み、日本の政治、経済、文化の中心となってゆく。横浜でそんな新しい時代の様子を眺めていた蓮杖は、これからの写真館は横浜で

はなく東京で活動するべきだと考えるようになった。美津が亡くなると蓮杖は、早速、何度か東京へ足を運び、東京のどこに移転したらよいかを探すことにした。

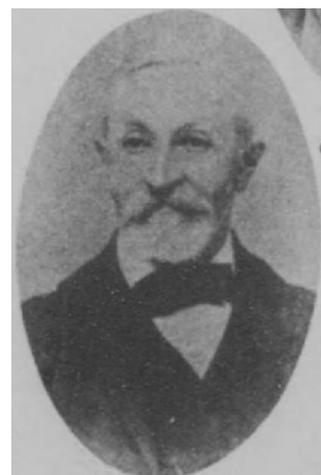
こうしてようやく東京浅草、浅草寺本堂裏手に当たる、浅草公園5区49番地に約40坪ばかりの土地を借り受けて、以前から懇意にしていた大工の筒井に新居の建築を依頼することにした。この家は間口五間奥行六間、平屋造りの一部を二階にして、その二階の下は材料置場とし、その隅に内井戸を掘り、通りに面した方を店にして、その裏手には八畳と六畳のほかに板の間などの部屋がある家であった。また多くの外光を取り入れられるようにガラス戸も多く用いていた。仕事場は二階の十二畳の部屋で、後の事にはなるが、蓮杖はこの部屋で長男の東太郎と共に写真背景画を制作することになった。

明治9年(1876)、蓮杖は横浜からこの家に移り住む。この浅草公園五区で蓮杖は函館戦争と台湾戦争(台湾出兵)の図を、写真を参考にしてパノラマ画として描いている。このパノラマ画は同じ明治9年(1876)に東京浅草で展覧された。このことは、明治9年(1876)4月7日付けの「東京絵入新聞」に、画家にして写真師の下岡蓮杖が浅草の奥山に「御安見所(またの名を油絵茶屋もしくはコーヒー茶屋)」を開いたという記事が載っていることから確認できる。これは当時珍しかった油絵の見世物小屋に、偉人の肖像画や函館戦争、台湾出兵のパノラマ画を飾り、入場料は一銭五厘で、観客全員にもれなくコーヒーを振る舞うという趣向であった。このパノラマ画は、蓮杖が己自身が知っている知識のほかに実際に函館戦争、台湾出兵に参加した者、台湾出兵に従軍した岸田吟香の語った話などから当時の様子などを聞き、函館戦争については弟子の横山松三郎が撮影した函館の風景写真を、台湾出兵については松崎晋二が撮影した現地の写真を参考にして描いたという。

この2点のパノラマ画は、後に「守田仁丹」の守田治兵衛の所蔵となり、その後、九段の靖国神社境内の遊就館に寄贈されている。

(森重和雄)

註1：在日外国人の商工名鑑「ジャパン・ディレクター1903年版」に掲載された中沢源蔵の広告。1872年(明治5年)創業とある。(横浜開港資料館蔵)



ジェームス・ハミルトン・バラ  
(倍加運動委員編『日本基督教  
会史略』(協力伝道局事務所、  
大正11年)より)